

脚 元 を 見 つ め て

—日本装削蹄協会の現状と課題—

佐藤浩二[†] (公社)日本装削蹄協会会長



1 はじめに

日本獣医師会と日本装削蹄協会(以下、日装)は、産業動物としての馬及び牛に対して、アニマルウェルフェアの観点から、飼育環境、食餌、病気の予防や治療等の各局面を通じ、またワンヘルスの観点から、家畜衛生、公衆衛生の各分野において、組織はもとよりそれぞれの会員が、獣医師と認定装蹄師・認定牛削蹄師という専門職業人であるとの認識のもと、よりいっそう連携を深めてわが国の関連産業の発展に対して貢献していく立場にあると考えられる。こうした意味から、今回伝統ある日本獣医師会雑誌に寄稿する場を与えられたことは誠に光栄であり、この機会に公益社団法人という新しい立場に立脚して5年を経過した日装の現状と課題、さらには今後の展望について述べさせていただきたい。

2 日装と資格認定制度の歴史

わが国における洋式装蹄は、富国強兵の国策のもと陸軍を中心に技術の向上が図られ、明治23年制定の蹄鉄工免許規則により、装蹄師資格制度が確立された。その後戦時色が強まる中、昭和15年に装蹄師法が制定され、装蹄師と呼称が改められるとともに、各道府県に団体会員制の装蹄師会が設立され、それらを束ねる形で「日本装蹄師会」が同年11月に設立された。

同協会は戦後GHQの勅令団体解散の方針により、昭和22年に解散させられたが、関係者の尽力の結果、翌昭和23年9月に「(社)日本装蹄協会」が創立され、その後「日本装蹄師会」への名称変更を経て、平成24年11月に、現在の(公社)日本装削蹄協会に移行したものである。

一方、装蹄師の免許制度は昭和45年の装蹄師法廃止まで国家資格として継続されたが、廃止後は、日装が自ら資格認定を行う認定制度に移行し、現在に至っている。また、戦後の畜産業の隆盛に呼応して、乳用牛や肉用牛の飼養頭数が大いに増加し、これらの牛の護蹄管

理を行う牛削蹄師養成と資格付与が社会的要請となった。こうした背景のもと、昭和40年に日装が牛削蹄師の資格認定制度を構築・実施し、今日に至っている。

3 日装事業内容の現状

新公益法人においては公益目的事業の実施が義務付けられ、具体的には、学術、技芸、慈善その他の公益に関する法律に掲げる事業であって「不特定かつ多数の者の利益の増進に寄与するもの」と定められている。

そこで、公益社団法人である日装の定款では、「本会は、馬及び牛のフットケアを推進することにより、健康で能力を十分に発揮できる馬や牛が馬スポーツ及び畜産において利活用され、もって馬スポーツを通じた国民の心身の健全な発達及び国民への畜産物の安定供給に寄与することを目的とする」と定めたところであり、この目的を達成するために行っている事業の現状に触れることとする。

(1) フットケア(護蹄)の普及推進

馬や牛の飼養管理では、蹄を清潔にし定期的な装蹄や削蹄を行うことが肝要である。

現在、日本の馬飼養頭数は、約74,000頭(競走馬関係40,700頭、乗用馬15,500頭、その他17,800頭)であり、それらの大半を占める競走馬や乗用馬では蹄のコンディションが直接パフォーマンスに影響することから、管理者の多くはフットケアの知識を有し、日々の蹄への関心も高い。

一方、牛の飼養頭数は約381万頭(乳用牛164万頭、肉用牛157万頭、その他60万頭)であるが、多くは集団飼育され行動範囲も限られることから、運動量も少なく、その結果、蹄が伸び過ぎ、長く放置すると蹄の変形や蹄病等を生じ、ひいては全身の健康状態にまで影響が及び、生産性の低下を惹起する等の問題を抱えている。こうしたことから、国が定めた畜産の近代化を図る基本方針においても、生涯生産性の向上やアニマルウェルフェアの推進が強調されている。

以上のことから、日装ではホームページや機関誌

[†] 連絡責任者：佐藤浩二 (公社)日本装削蹄協会)

〒105-0004 港区新橋4-5-4 JRA新橋分館

☎ 03-6821-4450(代) FAX 03-6821-4460

E-mail : sato@farriers.or.jp

「蹄」を通じて、馬や牛のフットケアに関する情報を広く発信している。これに加えて、馬の生産者や牧場スタッフ、乗馬愛好者や乗馬クラブのスタッフを対象とするセミナーを開催するとともに、牛については牛飼養農家を対象に、定期的な牛削蹄の励行が生産性向上に繋がることを主体に、全国各地で開催する講習会を通じてフットケアの重要性を訴えている。

(2) 認定装蹄師及び認定牛削蹄師の養成

装蹄師に関しては、日装の装蹄教育センターで1年間の全寮制講習（定員16名）を実施し、講習修了者を対象に2級認定試験を実施している。

また、牛削蹄師に関しては、一般人を対象に1回2日間の講習会を年間5～6回開催し、講習修了者を対象に2級認定試験を行い、年間約200名を養成している。

また、装蹄師及び牛削蹄師のいずれにおいても、2級資格取得後4年以上経過した者を対象に1級への昇級研修会と試験を、さらに1級資格所得後9年以上経過した者を対象に指導級への昇級研修会と試験を実施し、合格者をそれぞれ昇級させて技術の高度化と人格の陶冶に努めている。

(3) 認定装蹄師及び認定牛削蹄師の資格認定

外部委員で構成される認定資格審査委員会において、認定試験合格者を対象に審議を行い、認定装蹄師と認定牛削蹄師の資格を認定している。

また、認定資格取得者に対して、5年ごとの資格更新を義務付け、有資格者や装削蹄実務者の把握に努め、計画的な養成に反映させている。

平成29年1月現在、日装に登録している認定装蹄師は599名、認定牛削蹄師は2,689名に及んでいる。

(4) 認定装蹄師及び認定牛削蹄師の技術向上

装蹄や削蹄は、乳用牛や肉用牛にあっては、その生産性の向上と経営の合理化に密接に関連し、スポーツ用馬にあっては、運動能力の向上と潜在能力発揮に直接関与し、畜産や馬スポーツの安定的発展を脚元から支えている。

そこで、資格を付与した装削蹄師の技術向上が重要なテーマとなるとの認識に立ち、地域ごとに装蹄や牛削蹄の技術向上研修会を開催し、時代に即応した新しい知識や技術の習得を推進している。さらに、海外から著名な装蹄師や牛削蹄師を招聘し研修会を開催するほか、農林水産祭参加・全国装蹄競技大会及び全国牛削蹄競技大会を毎年秋に開催し、全国から予選を勝ち抜いた選手が日頃の研鑽の成果を競い合うことで、その技術の普遍化と高度化に努めている。なお、それぞれの全国大会優勝者には、農林水産大臣杯が授与され、関係者にとって大いなる名誉とされているところである。

(5) 目的達成上必要なその他の事業

前述の事業のほか、装蹄及び牛削蹄に関する学術の普及振興、フットケアに関する調査研究、装削蹄資材の改良、図書の刊行を行っている。

4 今日の課題とその展望

(1) 装蹄師関連事項

ア 少子化が進む中における講習生志望者の確保

装蹄師の就業先は大別して、JRAのトレセンや各地の地方競馬などの競走馬装蹄領域のほか、日高地方を中心とした軽種馬生産地の装蹄とフットケア、全国各地の乗馬クラブの繋養馬を対象とした乗用馬装蹄領域などがあり、それらの領域を合計すると全国で約600人の認定装蹄師が個人開業または団体職員として就業している。

日装では、若手装蹄師の養成と、それらの領域における就業のサポートを通じて全国における装蹄師の適正配置に努力しているが、少子化だけでなく、失業率の低下等社会情勢の変化の余波を受けて、ここ数年は講習生募集枠16名を若干下回る応募者に止まっているのが現実である。

特に地方競馬場の閉鎖・廃場は、若手装蹄師の就業先の門戸を狭めただけでなく、関係者の子弟の減少にも繋がり、ひいては装蹄師を志望する若手後継者の減少をも引き起こしている。幸い近年は地方競馬も一時の低迷から脱し、比較的安定的に運営されているが、今後は地方競馬場で就業する装蹄師の高齢化を見据え、彼らの後継装蹄師の補充を念頭に置いた若手装蹄師の養成と確保に努めなければならない。

このような情勢を背景に、日装では全国の装蹄師の配置適正数のシミュレーションをふまえ、必要員数を確保するために養成講習会の受講料の見直しや、一般社会への広報活動の充実等の各種施策を展開中である。

イ 最新技術の紹介と普遍化

日本の装蹄技術は、ドイツ方式を基盤に軍馬の護蹄や装蹄を目的とした技術として体系化され、国内に広く普及した。しかし、戦後の国内では競馬が主流となり、特に昭和56年に始まった国際G1レースであるジャパンカップを契機に競馬の国際化が進展し、欧米の競走馬装蹄法が紹介されたが、国内専用のアルミニウム製競走用蹄鉄（兼用蹄鉄）の製作、導入等の努力により、この分野での装蹄法は、欧米と遜色のない技術レベルを維持している。

一方、馬術競技の国際化の進展とともに欧米の乗用馬装蹄法が紹介され、さらには馬の歩行動作の科学的な研究も進展する中で、わが国の伝統的な装蹄方法についてもさまざまな角度から見直しが図られて、それらの新たな技法や知識は、養成教育はもとより全国装

蹄競技大会や各種の技術研修会を通じて、日装会員へ普及が図られている。

ウ 東京オリンピック・パラリンピック時の協力体制の構築

2020年の東京オリンピック・パラリンピックでは世田谷区にある馬事公苑とお台場の一部において馬術競技が開催されることになり、目下、急ピッチで会場の整備が進められている。両大会の馬術競技には、比較的長期にわたり世界各地から約250頭の競技馬が参集するが、そこには競技馬の健康管理や護蹄のための備えとして、獣医師や装蹄師の協力が不可欠である。自国から専属の獣医師や装蹄師を帯同する国もあるが、主催者が用意する開催地常駐の獣医師や装蹄師に依存する国も存在する。そこでは国内の装蹄師による世界基準に基づいた乗馬装蹄技術の提供が求められることから、日装としては多くの関係者と力を合わせて、そのニーズに応えることができる装蹄師チームの構築や体制整備に努める必要があると考えている。

エ アニマルウェルフェアの観点に立った装蹄の実践

2400年ほど前に、欧州の一部地域で金属の蹄鉄が開発され、装蹄という技術が誕生したが、今日の観点に立てば、まさにアニマルウェルフェアに根ざした知恵であったといえる。すなわち肢蹄の保護を図らなければ、蹄の摩滅が角質の成長を上回り、そのまま放置すれば蹄の健全性が損なわれ、運動を継続することすら困難になりかねないからである。その後、時代の流れとともに、蹄鉄の構造や素材が改良され、単なる摩滅防止だけでなく、装蹄の目的にはスポーツシューズと同じように馬の運動能力の向上に直接貢献し、あるいは馬の運動器傷害に対する予防や改善にも有用性を発揮するなど、技術の多様化が進んでいる。装蹄に限らず、蹄全体の健全性を維持するための護蹄管理のノウハウも含め、アニマルウェルフェアの観点に立った装蹄の実践に果たす装蹄師の役割は重要であるといえる。

(2) 牛削蹄師関連事項

ア 口蹄疫・牛白血病等の伝染病予防への貢献

2010年に宮崎県で発生した口蹄疫は、まだわれわれの記憶に新しいが、依然として各国において流行がみられる現状である。口蹄疫は蹄にも病変が認められることから、蹄を間近にみて作業をする牛削蹄師が第一発見者になる可能性も十分にある。しかしその異変に気付くためには、広範な知識と、その知識をつねに新しくし得る環境に置かれている必要がある。また牛削蹄師は、いくつもの牛飼養農場を移動して仕事をすが、自らが感染症の媒介者にならないためには器具機材や衣服の消毒の励行が求められる。したがって効果的な消毒法に関する知識もつねに更新しておく必要

がある。こうしたことは、口蹄疫ばかりでなく近年増加傾向にある牛白血病をはじめとした多くの感染症についても当てはまるといえる。

日装では、機関誌「蹄」で必要な最新の情報を紹介しているが、これに加えて、認定牛削蹄師を対象に、全国地区ごとに「牛削蹄師スキルアップ講習会」を開催した際に、伝達すべき知識や技術をセミナー形式で直接伝える努力も重ねている。ちなみに過去に取り上げられたテーマとしては「基本的な消毒の方法」、「口蹄疫の防除と蔓延防止」、「牛白血病の流行と防あつ」などがあげられる。これらの講習会は、地元の家畜衛生保健所や各地のNOSAI等の協力を得て、過去5年だけでも全国22カ所、延べ1,393名の認定牛削蹄師及び関係者が参加しており、受講した認定牛削蹄師はつねに新しい蹄病や衛生に関する知識を持って仕事にあたることができるようになる。

日装としては、今後ともこの事業の継続を図ることにより、畜産における伝染病の予防に貢献していかなければならないと考えている。

イ アニマルウェルフェアの観点に立った牛削蹄の実践

牛削蹄は、装蹄よりもさらにアニマルウェルフェアとしての意義が高い。なぜなら乗用馬や競走馬のほとんどが装蹄の恩恵を受けているが、乳用牛や肉用牛生産の現場では認定牛削蹄師による定期的な削蹄を行っていない農家も少なくない。乳用肉用を問わず牛の飼養環境は、馬と違って日々の運動量は少なく、蹄の摩耗ではなく、蹄の過剰な伸長が大きな問題になる。そこで少なくとも年2回の定期的な削蹄が推奨されるが、現在では牛の飼養環境が多様化していることから、それらの環境に合わせて、たとえばフリーバーンやフリーストール用の削蹄法や、タイストール用の削蹄法などが提唱されている。また本会では、枠場を使わず牛削蹄師が自らの身体を使って牛の肢蹄を拳上し保定する単独保定法のほか、枠場を使って肢蹄を保定し、電動削蹄器を使う枠場保定法を紹介することで、牛の個体に合わせて牛への負担がより少ない方法を選択できるよう指導している。

ウ 「情報伝達」の仕組み作りの充実

牛削蹄師は、全国に分布するとともに、日常的に各地を移動しながら広範囲の農場をカバーしている事例も多い。したがって、個々の牛削蹄師に対して、適切な時期に、適正な内容を、的確に手元に伝達する仕組み作りのためには、何より日装の組織のいっそうの充実が必要である。このためには、まずわれわれ日装関係者自らの弛まぬ努力が必要であることは、論を待たないが、中央・地方を問わず行政機関をはじめとする関係諸機関との意思疎通をよりいっそう深めていく必要もあろう。そうした意味からいえば、いささか回り

道となるかもしれないが、われわれ「牛削蹄師」の存在・役割を畜産関係者はもとより、既存の概念の枠を越え、幅広く世の中に伝えていくような取り組みも必要なのではないかと感ずる今日この頃である。

5 おわりに

これまで、日装を取り巻く現状と課題に関して述べてきたが、畢竟いずれの課題も、個々の装蹄師・牛削蹄師一人ひとりが、対象である馬や牛の脚元を謙虚に見つめ

て、専門職業人としての知識と技術を最大限に発揮していくことが求められている。

いささか我田引水のきらいはあるが、「脚元を見つめる」という観点に立てば、われわれ装蹄師と牛削蹄師にとって、日本獣医師会会員の臨床獣医師の皆さま方とのより緊密な連携が不可欠と考えられる。従来以上の交流・情報交換・協業をお願いする由縁であり、今後ともよりいっそうのご理解とご尽力をお願いして筆を置かせていただく次第である。